

惜別の辞①

期待に満ちてLAXに降り立つてから、いつの間にか28年が経ち、遂にアメリカを去る時が来た。LAの青い空、乾いた爽やかな空気が、開放的な人々・・・この地を去るとなると何もか



3-19-09

コミュニティー社会のアメリカ

た。10年を夢中で働き、陽光に満ち溢れる外の空気も吸わずに朝早くから夜中まで働き、10年経って自分の人生は何だろうと疑問に思い始め、それまでの職を辞して独立した。これからは自らの意思で日米の懸け橋になろうと・・・。

カはコミュニティー社会ということだった。自分たちのコミュニティーは自分たちで住みやすい環境を作る。そのためにはお金を寄付し、集会に参加して発言し、ボランテアで汗を流す。自分たちが選んだ国・州・市などの議員とは積極

い、政治が悪いのも現状に不満なのもすべては自分たちの所為、文句を言うだけでなく変える努力をするのが先決、だから「国が何をしてくれかではなく、自分が国に何ができるか」という言葉が人々に共感を持って迎えられる。

もが例えようもなく懐かしく愛しい。過ぎていく一刻一刻が宝石のように大切に感じられる。駐在員として5年の任期で赴任してきた時は、まさか28年間にもわたる滞米になるとは夢にも思わなかつ

以来18年、ビジネス・コンサルティングのかたわら勉強会、ゴルフ・トーナメント、経営セミナーと毎月の行事を催し、加えてインターナショナル・アートフェスティバル、サムライパレードなどの数々のイベントを企画・実行するうちに見えてきたのは、アメリ

的に接触し、自分たちの要望を伝える。公共サービスといえど声を上げないところには届かず、プレゼンスの高いコミュニティーには良いサービスがもたらされる。まさに民が主人の「民主主義」がアメリカ政治の実態であった。権利だけの主張ではな

駐在員であった10年間はこのようなことに気付かなかった。日々の仕事に集中し休日にはゴルフや釣り、仲間内のパーティーなどを楽しんだ。独立してさまざまなコミュニティーイベントにかかわり、少しずつ日系社会に触れアメリカ社会の実態を感じ始めた。「コミュニティー社会・アメリカ」これが私の感じたアメリカ社会である。

【若尾龍彦】